2010年10月

立正地理学会ニュース

No.100

THE RISSHO GEOGRAPHICAL ASSOCIATION NEWSLETTER

学会ニュースNo.100 トピックス

・秋季例会および講演会・臨地研究会会告
・第65回研究発表大会報告
・研究委員会の設置
・2010年度「彩の国環境地図作品展」のご案内
・評議委員会・総会報告
・100号発行を記念して
・地理学だより
・会費納入のお願い

会　告

○2010年度第34回秋季例会・第39回講演会・第107回臨地研究会のご案内（第2報）

第34回立正地理学会秋季例会と第39回講演会ならびに第107回臨地研究会を、徳島地理学会との共催により以下の日程で開催します。多くの会員の皆さんの参加をお待ちしております。

第34回秋季例会（徳島）・第39回講演会のご案内
1．日時：2010 年 11 月 6 日（土）13 時 30 分～16 時 20 分
2．会場：四国大学交流プラザ 4 階　第 2 セミナー室
　　〒770-0831 徳島市寺島本町西 2 丁目 35-8

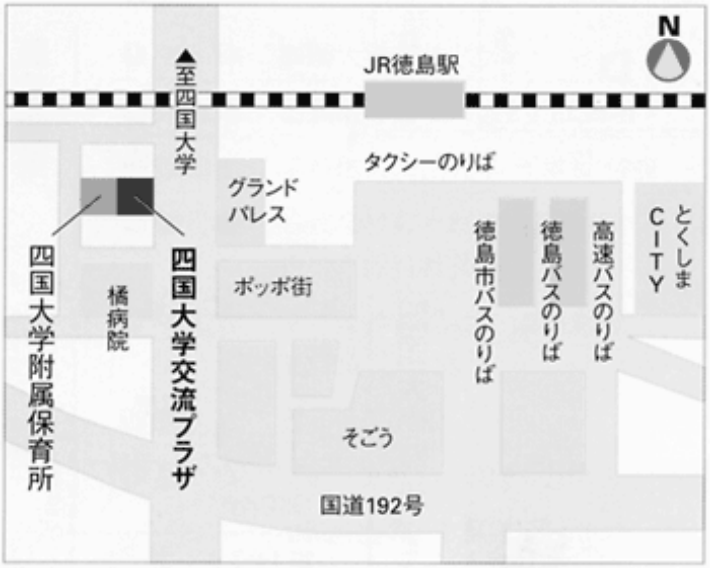
《第 39 回講演会》13 時 30 分～14 時 30 分
　羽山久男（徳島地理学会前会長）：近世阿波の絵図と地域像

《第 34 回秋季例会》14 時 40 分～16 時 20 分
　口頭発表
　　鈴木重雄（立正大）・正本英紀・井坂利章・古川順啓（徳島県庁）・東　彰一（JA 阿南）・大田直友（阿南高専）・鎌田磨人（徳島大）：阿南市南部における竹林拡大とその対応策についての住民の認識
　　横畠康吉（四国大）・大泉誠治（四国大・院）・中川大輔（四国大・院）：徳島県におけるデカップリング政策と中山間地域の農業について
　　吉本　勇（就実大）：産業観光の現況―岡山県を例に―
　　岡　義記（元鳴門教育大学）：四国山地中央部に見られる急斜面帯の尾根線と谷線の形成過程について
　ポスター発表
　　萩原八郎（四国大）：ブラジル調査旅行報告－サンパウロ州内陸部弓場（ゆば）農場の事例紹介を中心に－

《懇親会》17 時頃～19 時
　会場は未定ですが、会費は一般会員 5,000 円、学生会員 3,000 円の予定です。
　参加を希望される方は、必ず集会委員会までお申し込みください（詳細は次頁）。

《講演会・秋季例会会場》

以下の地図をご参照ください。JR 徳島駅改札口から約 300m です。



第 107 回臨地研究会のご案内

1. 日　時：2010 年 11 月 7 日（日）9 時～15 時
2. 集合場所：JR 徳島駅改札口
3. テーマ：水と光が輝くまち徳島と中心商店街
4. 案内者：萩原八郎（四国大）・横畠康吉（四国大）・吉本　勇（就実大）・
   岡山真知子（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館開館準備室専門学芸員）
5. 参加費：3,000 円（予定・昼食代を含む）
6. コース：JR 徳島駅改札口前集合→市原→文化の森・鳥居龍蔵記念博物館→
   橋本（昼食）→阿波銀プラザ前→東新町商店街→JR 徳島駅前解散
7. 募集定員：25 名

※懇親会・臨地研究会の申込み

参加を希望する会員は、ハガキもしくは電子メールに氏名・所属・電話番号または電子メールアドレスを明記し、立正地理学会集会委員会宛にご連絡下さい。締切日は 11 月 2 日（火）必着とします。メールアドレスは次のとおりです。

立正地理学会メールアドレス：geosoc@ris.ac.jp

なお、現地世話人は萩原八郎会員（四国大）、メールアドレスは次のとおりです。

萩原会員メールアドレス：hachiro-hagiwara@shikoku-u.ac.jp

○2010年立正地理学会評議委員会報告

2010 年 6 月 4 日（金）18:00 より立正大学熊谷校舎アカデミックキューブ 6 階会議室において、出席者 16 名、委任状提出者 10 名、計 26 名にて開催された。議事では、まず 2009 年度事業報告が島津常任委員長よりなされた。次に 2009 年度決算報告が山田庶務会計委員長よりなされ、いずれの事項も承認された。引き続き、2010 年度事業計画案・予算案が提出され、いずれの事項も承認された。（集会委員会）

○2010 年度（第 65 回）立正地理学会総会報告

2010 年 6 月 5 日（土）11:30 より立正大学熊谷校舎アカデミックキューブ A205 教室において、出席者 48 名、委任状提出者 273 名、計 321 名にて開催された。正議長に崎浜　靖会員、副議長に須藤進太郎会員を選出し、議事に入った。議事では、まず 2009 年度事業報告・決算報告・会計監査報告がそれぞれ島津常任委員長、山田庶務会計委員長、松井会計監査からなされた。審議後、いずれの事項も承認された。引き続き、2010 年度事業計画案・予算案、立正地理学会役員・各種委員会委員案が提出され、会員からの質疑を含めた審議を経て、いずれの事項も承認された。　（集会委員会）

○2010年度（第65回）立正地理学会研究発表大会報告

今回も広報委員会が研究発表大会の様子をレポートします。

1．2010年度　研究発表大会の概要

日時：2010年6月5日（土）　総会・研究発表　9:40～17:20　懇親会　17:30～19:00
会場：立正大学熊谷校舎アカデミックキューブ2階
大会参加人数：およそ140名

口頭発表(浅賀加奈子会員撮影)

ポスター発表(浅賀加奈子会員撮影)

2．2010年度発表大会に参加して（学部生の声）

地球環境科学部　地理学科　1 年　木村友哉君
私は、熊谷の小麦粉文化についての発表に興味を持ちました。熊谷市の小麦生産の意外な姿に関心を持ちました。熊谷市の小麦収穫量が過去 50 年間埼玉県内で第 1 位ということと、「熊谷小麦」の知名度向上を目指す団体があるということが勉強になりました。

地球環境科学部　地理学科　1 年　佐々木拓馬君
私は、「地球地図」を利用したデジタル地誌教材づくりーモンゴルを事例にーに興味を持ちました。理由は、教職を考えており、そのため教材作りに関心があるからです。勉強になったことは、地図や写真を見ながら読むと理解しやすいということです。実際に事例を挙げているから考えやすかったです。

2010 年度発表大会に参加しておられ、さまざまな分野で活躍されている地理学科の OB の方々に、学生のみなさんへのアドバイスなどを伺ってみました。

伊藤善文先生（神戸市立駒ヶ林中学校） 1972 年度卒
私が立正大学に入学したきっかけは、高校時代に使用していた地図帳に「立正大学　田中啓爾」と載っていたからです。地理学生として心がけておくことは地理的な見方・考え方を身につけるために、現地に行って自分の目で見て考えること、また地図をよく見て「なぜそこに山があるのか」などを考えることです。
教員を目指している学生は、まず絶対条件として子供を好きになることです。また、学生のうちに専門性を身につける（地理を極める）ことも重要です。教員になってからは、生徒の目線で考え、生徒の話を聞いて、生徒を理解し、教材研究もしっかりした上で授業に臨むことが大切です。

高橋　純さん（山形県長井市市役所） 2001 年度卒
大学時代は内山先生のゼミで農業に視点を置いて研究していました。卒論・修論ともに山形の農業について研究しました。現在は山形県の市役所で勤務しています。
大学時代の思い出としてあげられるのは、授業終了後に仲間と「夜の巡検」と称し、先生が授業で紹介された地域に実際に足を運んだことですね。直接目で見ることはとても大切なので、ぜひみなさんも実践してみてください。

田村純一さん（東武バス株式会社） 2005 年度卒
大学時代は、商店街や都市の衰退について研究していました。人の動き、特に地域内における人間行動に焦点をおきました。
現在の職場では、地域的な視点を学んだことで路線の特徴をふまえた上で、改善点を見つけ出すことができるという、地理学の利点を生かしながら働いています。

○立正地理学会ニュース 100 号発行を記念して

今回は立正地理学会ニュース発行 100 号となりました。このことを記念して発行当時の様子を新会長となられました堂前亮平会長や大塚昌利前会長、1990 年当時の様子について学会ニュースに携っておられた助重会員に原稿をお願いしました。

立正地理学会会長就任にあたって

本年 6 月、緑に包まれた立正大学熊谷校舎で開催されました立正地理学会総会におきまして、はからずも会長に選出され、身に余る光栄であるとともに責任の重さを感じているところでありますが、立正地理学会を少しでも発展するように、その職責を全うしたいと思っております。
さて、立正地理学会は、言うまでもなく立正大学地理学教室を母体としたものであり、その誕生は 1947 年（昭和 22）にそれまでの立正歴史地理学会を廃し、田中啓爾先生を初代会長として設立されたものであります。60 年余りの長い歴史をもち、数多くのすぐれた研究成果を世に出してきた伝統ある地理学会のひとつであります。地味ではありますが、研究発表の場として長年にわたって刊行されてきた学会誌「地域研究」を見るとき、その重みを感じております。

私が立正地理学会の各種委員として運営に関わっていたのは、大学院に在籍していた時と地理学科助手に就いた1972年度から1975年度までであります。当時は日本の高度成長に伴って、大学の大衆化が進んできた時代であり、また全国の大学に吹き荒れていた学園紛争の真っただ中であり、学園紛争は立正大学の大崎、熊谷両キャンパスにおいても例外ではありませんでした。そのような時代の中でも地理学に関心を寄せる学生は多くおり、一時立正大学地理学科の学生全体で 1000 名を超えていたこともありました。

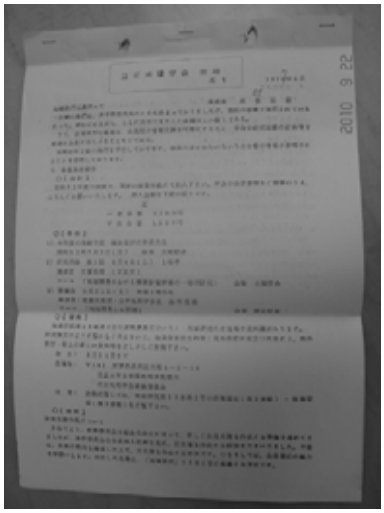
立正大学の地理の特徴は、フィールドワークに強いということをよく耳にしてきました。私自身も学生時代に体験した地理学巡検や助手として先生方の巡検の補助として各地にでかけ、多くのことを学んできました。フィールドで学んだことは、その後勤務した大学の教育に活かして、学生の指導にあたっているところであります。このようなフィールドワークを大切にする学風は、各地における教育の現場で、また会社や役所など様々な職場で遺憾無く発揮されており、そうした様子を目の当たりにすることも多々ありました。立正地理の学風が脈々と受け継がれていることを、大変心強く思っております。

最後になりましたが、立正地理学会のさらなる発展に向けて、会員の皆様のご支援を切にお願いする次第です。（堂前亮平会長）

立正地理学会ニュース No.100 に寄せて

立正地理学会ニュースが、本号で No.100 を迎えた。N0.1 の発刊が 1977 年であったから、33 年目で迎えたことになる。そこで、以下に発刊当時のことを記してみたい。

第 1 号は、「立正地理学会会報 No.1」であった。これを発行することは、井出策夫常任委員長の時代に決まっていたが、事情があってやや遅れ高村弘毅委員長の時代に発行をみたものである。巻頭に委員長による「会報発行にあたって」の一文があり、そこには〈会員間の情報交換を円滑にすること、学会の研究活動の計画等を敏速に会員に知らせることなど〉が趣意として示されている。



学会ニュース第 1 号
（須田恵里香会員撮影）

その背景には、機関誌『地域研究』の刊行が年 2 回であり、なおかつ投稿原稿の少なさなどから、往々にして発行日が予定日よりも後ろにずれ込んでしまうといった事情があった。そのため、総会や研究発表大会をはじめとする会告が間に合わなくなることもあり、会員にとっては発表や例会への参加申し込みに支障が生じるという状況であった。

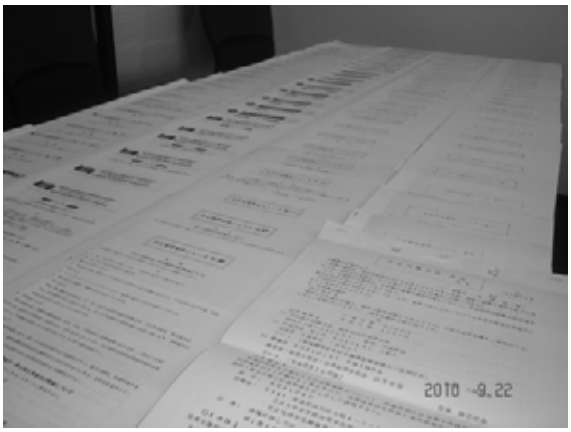
そこで、機関誌とは別に会報を発行して、年間を通じて情報がスムーズに伝わるようにすることにしたのである。No.1 は A4 で 2 ページに過ぎず、奥付もないという簡単なものであった。しかし、No.2 からは今日に続く「立正地理学会ニュース」と改名されて 6 ページになり、以後若干のページ数の増減はあったものの、各委員会からの依頼事項に加え、地方例会の開催通知や、研究委員会の募集記事などが織りこまれるようになった。

年 2 回だったのは最初の年だけで、1978 年からは年 3 回発行されるようになった。作る側としては当初煩わしくもあったが、これも国会図書館に提出しなければならないものだからということで、誤字や奥付などにも気を配るようになった。No.4 からは、会員による投稿も始まり、卒業生が各地で活躍する状況も伝えられるようになった。その結果、次第に体裁も整い、内容が充実するのに伴ってその効果も表れるようになり、会員からも好評を博すようになった。

年 2 回の機関誌と、年 3 回の学会ニュースにより、会員はほぼ 2 か月に 1 回の割合で、

学会からの情報を得ることができるようになっている。近年は内容も豊富になって、学会事務局からの情報発信だけでなく、会員から寄せられる記事も多くなっている。これらが学会員の絆を強め、学会の一体感を生む大きな要素になっていると思う。とはいえ、編集に携わる委員、役員のご苦労は相当なもので、頭の下がる思いである。感謝しつつ、No.200、No.300 へと続いてくれることを願って止まない。　（大塚昌利前会長）

「デジタル化」初期の学会活動と編集作業



歴代学会ニュース（田部井敬太会員撮影）

私は、大学院修士課程に入学した 1986 年度から文学部助手 2 年目の 1992 年度まで、編集委員として「学会ニュース」の編集に携わりました。この時期にはワープロやパソコンが大学や家庭に普及し始め、学会のさまざまな業務も手書きからパソコンでの管理に移行する過渡期にあたっていました。各委員会ともパソコンの操作に習熟しきっていない院生たちが、時には 1 日かけて入力したデータを消してしまったり、時にはああでもないこうでもないと議論し合ったりしながら延々作業を続けていました。

編集委員会でもこうした「デジタル化」の流れに対応するため、さまざまな取り組みを進めました。『地域研究』に関しては、1987 年 6 月から執筆要領に「ワードプロセッサーによる投稿」の項目が設けられ、1989 年 5 月にはワープロソフトの目覚ましい進化に対応すべく一部が改定されました。また、1989 年は『地域研究』が第 30 巻(第 50 号)を迎えるにあたり、表紙デザインの一新、『地域研究』総目録の作成、独自の地域コードで『地域研究』所収の論文等を検索できる立正地理学会レファレンス・データバンク「RisReD」の発足などで膨大な作業が発生し、私自身も毎日のようにデータの入力に追われた覚えがあります。

こうした流れのなかで、「学会ニュース」についても作成方法が従来の活版印刷からワープロソフトによる完全版下に変わりました。これにより、編集委員にとっては手書き原稿の整理や校正の手間が大幅に軽減されました。反面、ワープロやパソコンを使われない会員もまだまだ多かったため、編集委員が手書き原稿をワープロ打ちすることもしばしばありました。

編集作業の電子化が日々進んだ反面、「学会ニュース」の発送作業は宛名シール貼りや三つ折り作業など手作業に頼らざるを得ない部分が多く、委員が総出で作業を行っていました(発送作業に関しては、おそらく現在も大きな変化はないでしょうが)。この作業も「住所が違っている」とか「〇〇さんの宛名シールがないぞ」とか、いろいろなトラブルが起きましたが、ワイワイガヤガヤしながら大人数で作業したことも、今では楽しい思い出の一つになっています。　（助重雄久会員）

〇研究委員会の設置

昨年度からの「高地における地理環境」研究委員会と「熊谷地域」研究委員会が継続で設置され、新規の応募がなかったことをご報告いたします。（長坂副常任委員長）

○地理学教室だより

今回はセミナーおよびフィールドワークについて原先生と 3 年生に紹介して頂きました。

セミナーおよびフィールドワーク報告（原美登里クラス）

日時：2010 年 6 月 21 日～25 日
場所：秋田県美郷町六郷町・岩手県盛岡市
参加人数：地理学科 3 年生 11 名
テーマ：水と人、水とまちとの関わりを明らかにする。
セミナーおよびフィールドワークの狙い：卒業論文作成の準備として、FW の事前準備、
現地調査方法および GIS 化、まとめ方

フィールドワーク対象地としての六郷町と盛岡市

２年次のフィールドワークでは水質調査や気象観測における基礎的な実習を重点的に行い、３年次のフィールドワークは卒業研究を念頭においた予行練習として位置づけている。そのため、３年生は文献発表を通してテーマを設定し、研究・調査方法を考える。その後、グループディスカッションで内容を吟味し、さらにセミナー全員で意見交換を行う。また、それらフィールドワーク準備と並行して、フィールドワーク地の地域概要を分担し、地域の基礎的な知識の共有を図っている。

今回のフィールドワークは、秋田県美郷町六郷町と岩手県盛岡市で行った。現地調査は湧水班、河川・水路班、水文化班の 3 班に分かれて調査した。各班の中でも一人一人がテーマを設定し、地図の取り寄せや聞き取り調査のアポイントメントをはじめ、事前準備を進めた。

六郷町は「名水百選」や「水の郷百選」にも選定された町で、その市街地には「ニテコ湧水」や「諏訪清水」など、60 箇所以上の湧水が存在している。フィールドワークではその中から選定した40箇所の湧水や水路の水質調査をはじめ、農業用水路の流量計測および水質調査、河川の生物観測、地域住民や観光客への聞き取り調査を通じて、六郷町がいかに水を維持・管理し、活用しているかの一端が明らかになった。六郷町にとって湧水は、地域住民の生活用水のみならず、農業・産業・観光・まちづくり・文化と多岐にわたった役割を担っている。そのため、六郷町は湧水を中心としたフィールドワークを行うのに適していると感じた。

盛岡市は、事前の地域選定プレゼンテーションで学生自らが選定した地域である。市内を中津川、北上川、雫石川の 3 河川が流れ、岩手山を臨む自然豊かな地域である一方、都市としても充実した地域である。調査内容は六郷町と同様であったが、湧水を中心とした町ではないため、どのように取り組むかは各班とも苦労した。しかし、鉈屋町にある二つの清水の維持・管理をはじめとした地域住民によるまちづくりに関する取り組みは、学生の興味・関心を引きつけるのには十分であった。ただ、鉈屋町のまちづくりは始まったばかりなので、今後の展開に注目したい。

フィールドワーク終了後は、現地調査データのデータベース化・GIS 化を進め、報告書作成に取りかかり、９月現在、報告書完成に向けて最終段階に入っている。この間、セミナーや集中ゼミを通じ、データベース化・GIS 化のみならず図表作成、分析方法、プレゼンテーションの方法について指導した。

（原 美登里会員）

水文化とは

佐藤　竜也（地理学科 3 年）

「水文化って何だろう？」と疑問を抱えつつ水文化班はスタートしました。話し合いの中で、行政・地域住民からみる内からの視点、観光客からみる外からの視点、水を活用した地場産業、水と水文化を中心としたオリジナルマップの作成といった 4 つのアプローチから水文化を調べていくことになりました。私は、行政による水を活かしたまちづくりと観光客にアンケート調査を行うことで、2 つの視点が合っているのか、異なっているのかを明らかにしました。六郷町では多くのアンケートを回収できましたが、盛岡では 20 枚にも届かない枚数と、アンケートの難しさを知りました。これらのアンケートからはそれぞれの町の現状を知ることができました。3 年のゼミでは現地調査計画のたて方、現地調査の方法、まとめ方に至るまで多岐にわたり学ぶことが多かったです。

FW で感じたこと

酒井　拓明（地理学科 3 年）

今回の FW では、六郷市街地の清水・湧水は約 60 地点あり、水路や井戸水も含め、40 地点の水質調査をおこないました。また、盛岡市街地では、8 地点の水質調査をおこないました。

これにより、六郷町と盛岡市の湧水の湧出量と硬度に大きな違いがあることが分かりました。六郷市街地では、湧出量が 10000cm^3/秒以上の豊富な地点が多くありました。一方、盛岡市街地の湧出量は 100cm^3/秒以下のもののみでした。硬度をみると、六郷市街地では平均 40mg/l の軟水がほとんどですが、盛岡市街地では 80mg/l と日本の平均的な値でした。

今回の水質調査結果については、現地でわかることもあれば、大学に戻ってから本や資料を調べ直してわかることも多く、一つひとつの要因を紐解く面白さを実感することができました。全体的な傾向から個々の分析まで行うことができ、卒論につなげた調査をおこなうことができました。

ニテコ湧水での聞き取り(原美登里会員撮影)

鉈屋町の湧水調査(原美登里会員撮影)

鉈屋町の湧水調査(原美登里会員撮影)

フィールドワーク報告書(須田恵里香会員撮影)

○2010年度「彩の国環境地図作品展」のご案内

立正大学地球環境科学部では、2002年度より「彩の国環境地図作品展」を開催しております。「彩の国環境地図作品展」は、身の回りの環境や地域の姿の観察・調査をおこない、地図として表現することにより、環境や地域に対する見方・考え方、地図の持つ可能性に対して、理解を深めることを目的としております。埼玉県内の小学校、中学校、高等学校、特殊教育諸学校に在籍する児童生徒を対象として、作品を募集しております。

作品の展示会、ならびに入賞作品の発表会・表彰式を下記の日程で開催いたします。ぜひ、お出かけ下さい。

《発表会・表彰式》

2010年12月　4日(土)　　立正大学熊谷校舎　アカデミックキューブ

《作品展示》

2010年11月　3日(水)～8日(月)　所沢航空記念公園　管理事務所
(西武新宿線　航空公園駅より徒歩すぐ)

2010年11月17日(水)～28日(日)　埼玉県環境科学国際センター
(JR鴻巣駅・加須駅よりバス)

2010年12月　1日(水)～　4日(土)　立正大学熊谷校舎アカデミックキューブ

2010年12月　7日(火)～19日(日)　埼玉県立　川の博物館
(東武東上線鉢形駅より徒歩20分)

入賞作品は、国土地理院「全国児童生徒地図優秀作品展」(2011年1月　9日～2月20日)に出展されます。また、入賞作品・優秀作品は「彩の国環境地図作品展ホームページ」でも閲覧できます。

「彩の国環境地図作品展」ホームページ　(http://www.ris.ac.jp/ecomap/)

鈴木厚志・原美登里(立正大学)・亀井啓一郎(立正大学・非)

○会費納入のお願い

今回の学会ニュース 100 号には「会費納入状況のお知らせ」を同封しております。2010年度分会費が未納の方は、同封致しました払込取扱票にてご納入下さい。なお、過年度分会費が未納の方は、過年度分も併せてご納入願います。会費および郵便振替口座の番号・加入者名は下記の通りです。

一般会員 4,000 円　学生会員 2,500 円
00130-8-13453 立正地理学会

なお、他の金融機関（ゆうちょ銀行以外）からお振込みされる際にご指定頂く口座は、以下の通りです。お振込みの際は、振込人氏名を会員ご本人の氏名として頂きますよう、お願い申し上げます。

銀行名	ゆうちょ銀行
金融機関コード	9900
店番	019
店名（カナ）	○一九店（ゼロイチキュウ店）
預金種目	当座
口座番号	0013453
カナ氏名（受取人名）	リッショウチリガクカイ

※学会ニュースや地域研究などの送付先の変更が生じましたら、お早めに立正地理学会までご連絡下さい。また、払込取扱票の払込人住所氏名の欄が未記入の物が見受けられます。とくに、住所変更のご連絡がなく、新住所のみご記入され、氏名のご記入のない払込取扱票の対応に苦慮しております。何卒、ご入金の際には氏名欄のご確認をお願いいたします。（庶務会計委員会）

編集後記

学会ニュースは今回で創刊100号を数えることになりました。長い歴史をもつ学会ニュースに携わることができ、100号という特別な号に立ち会えたことをとても嬉しく思います。これからも号を重ね、代々と引き継いでいけるよう、さらに精進していきたいと思います。　（広報委員　須田恵里香）

100号を迎えられたのはひとえに会員皆様のご協力のおかげと感謝致しております。学会ニュース発刊当時の様子や、デジタル化当時の様子などをお伺いすることができ、より感慨深い気持ちになりました。今後も身を引き締めて臨みたいと考えておりますので、会員皆様のより一層のご協力をお願い致します。　（広報委員長　原美登里）

立正地理学会ニュース No. 100
2010年 10月 14日発行　編集者 立正地理学会 広報委員会
発行者 立正地理学会　〒360-0194 熊谷市万吉1700 立正大学地理学教室内
電 話 048－539－1672 振 替 00130-8-13453